

日本の歴史上の人物を誰か一人挙げるとしたら、皆さんは誰を思い浮かべるだろうか。日本国民全員にアンケートをとったら、おそらく「織田信長」と「坂本龍馬」が一位と二位を争うのではないか。歴史をよく知らない人でも、上記2名の名前はなんとなく知っているはずだし、歴史マニアであればこの2人の革新性・独創性の話で盛り上がるはずだ。テレビの歴史番組でもこの2人がテーマになっていることが多いし、NHKの大河ドラマも、信長が登場する戦国時代か、龍馬が奔走する幕末を取り上げると視聴率がいいようである。

企業の社長さんたちが経営のヒントにするのは戦国時代の三傑(信長・秀吉・家康)であることが多く、最近増えてきた、いわゆる“歴女”なる女性も戦国武将がお好きのようだ。確かに、戦国時代には三傑以外にも、武田信玄・上杉謙信・毛利元就・伊達政宗・真田幸村など、ドラマの主人公になるような魅力ある人物が結集している。世の中の歴史好きな人の大半は戦国時代ファンと言っても過言ではない。

一方、グローバル化の時代の到来の影響か、英語学習に対する需要も増えている。ビジネスで英語を使う機会が多くなり、英語をもう一度ブラッシュアップしたいとお考えの方や、趣味や生涯学習の一環として英語を勉強したいと思っている主婦や年配の方も多い。

換言すれば、世の中には歴史を勉強したいという人と英語を勉強したいという人が相当数いるようだ。最近のテレビ番組におけるクイズ番組ブームもこうした傾向を反映しているのかもしれない。中には歴史と英語の両方に興味があるという方もいるだろう。実は私もその一人で、大学進学の際、史学科へ進もうか英米文学科へ進もうか悩んだくらいだ。そういう人にとっては、英語で歴史を学ぶことができれば一石二鳥ではないか。

また、中には歴史は好きだが英語は苦手、歴史は苦手だが英語は好きという人たちもいるだろう。ところが、どちらか一方に興味があるということは、勉強に対して好奇心旺盛であるということの意味しており、そういう方ならば、苦手なもう一方も工夫一つで難なく得意分野に変えることができる。私はかねがね、学校教育はなぜこういう手法を取らないのだろうかと思ってきた。

英語で歴史をやることで理解が深まることもある。例えば、世界史で「ポエニ戦争」(BC264～146)という事件があるが、これはローマとカルタゴの戦争だ。カルタゴはフェニキア人の植民市だが、フェニキア人はPhoenicianと綴る。ギリシア語ではPhoinix、ラテン語ではPunicusだが、単純にPhoenicianのhを無視してローマ字読みすると「ポエニ」と読める。

ローマ字と言えば、この表記法を最初に編み出したのが明治期に活躍したアメリカ人宣教師ヘボンである。ヘボンの綴りはHepburnだが、これをローマ字読み的に下手に発音するとヘップバーンとなり、かの有名なオードリー＝ヘップバーンと同じ名前であることがわかる。ヘップバーンが当時の日本人にはヘボンと聞こえたようだ。明治期の人には原音に近い表記で書こうという精神があったことが伺える。

勉強においては、こうした豆知識が勉強欲を掻き立て、さらなる追究をしていくきっかけになると思う。そういう意味では、歴史は歴史、英語は英語と別々にやるのではなく、時には両者を合成してみるという発想も大事なのではないか。

もちろん、そうした観点から「英語で歴史を読む」というタイプの本はこれまでに何冊も出版されているが、それらは歴史の説明文を英語にしただけのものが多く、本文もかなり長いので、よほどの英語・歴史好きか根性のある学習者でない限り、最後まで読み通せないのではないかと思う。また、ただ英文と和訳を提示されただけでも、語学の学習としては物足りない。もちろん、多読することは語学力養成には欠かせないことだが、独学する際の教材として見た場合は心許ない。

そこで、本書はまず、歴史のテーマを日本人のかなりの人たちが興味を持っている、信長・秀吉・家康が活躍する日本の戦国時代に絞り、それにまつわる事件やエピソードを簡潔な英文でまとめた。その英文も今後の英語学習で応用ができるような、構文上のポイントが必ず含まれている英文に仕立て上げた。各項の英文はそれほど長くはないから、英語学習という観点からも、挫折することなくこなしていける量だと思う。また、本書で取り上げる英語構文は、実用上頻度の高いものや日本人がつまづきやすい盲点を網羅しており、これらをマスターすることでひと

通りの構文学習は完成するようになっている。なお、英文は時代背景もあり、やや文語調に傾いたものになっているが、すべて、ネイティブスピーカーのクリストファ・バーナード先生の検閲・ご指導を受けた、自然なものばかりだ。

一方、和訳の部分を読んでいただくだけでも戦国時代の流れが理解できるような軽い読み物に仕上げている、さらに、歴史的背景に関わる解説(歴史の視点)では、通説とは異なる、様々な研究者・諸先生方の新説や、時には私自身の歴史観を紹介しているので、歴史好き・戦国通の方にも御満足いただけるものと確信している。英文に挑戦する方にとっても、本書は英単語の注釈が充実しており、辞書などがなくても読み進めるはずなので、電車の中などで読書用の本として活用していただいてもよい。

本書によって、歴史好き、英語好きの方が増え、さらなる学習欲のスパイスとなることを切に願っている。また、筆者のかねてからの念願であったが、前代未聞の企画であり、ビジネスとしても未知数であるこの本を出版する機会を授けてくださったプレイスの山内さんには心から感謝の意を申し上げる次第である。

2011年8月

小倉 弘